

まどい

第198号

秋田県羽後町仙道中学校昭和30年卒

1955（昭和30年）創刊

2011年2月20日発行

186-0003 東京都国立市富士見台 3-6-404
tel/fax 042-574-8694 ・直 090-2332-4408

まどい編集室

http://www32.ocn.ne.jp/~madoi/
mail: madoi30s@ce.mbn.or.jp

お疲れ様でした

今野正治さん

平成二十二年八月三日生涯を閉じました
ご冥福をお祈りします 合掌



月には今野正治さんが旅立ちました。数少ない私たちの同級生。すでに十二名に別れを告げるようになりました。

今野正治さんは、卒業後現在「千葉の社長」と言われる大友清五郎さん、武田卓夫さんとともに愛知県の繊維業界に就職されその後高度経済成長とともに繊維業界は輸入による不況に見舞われ多くの人たちとともに見切りをつけました。そして最後まで残ったのは武田卓夫さんだけでしたが、正治さんは繊維業界とは全く別の仕事を始め配管業を

昨年七月に金子健治さんが旅立ちました。そして八月には山登りに出かけたのですが、疲れたのでしようその翌朝に倒れてしまいました。そのまま救急車で病院に運ばれましたが「くも膜下出血」とわかり手術を施したのですが半身マヒとなりそのまま寝たきりになってしまいました。

仙道の兄を亡くし出かけています。またその八月には山登りに出かけたのですが、疲れたのでしようその翌朝に倒れてしまいました。そのまま救急車で病院に運ばれましたが「くも膜下出血」とわかり手術を施したのですが半身マヒとなりそのまま寝たきりになってしまいました。

それから十一月ヶ月半身マヒをして話す事も出来ないまま奥様より子さんの介護のもとで亡くなりなりました。

上の写真は、昭和五九年五月名古屋で行われた同級生会。今野正治さん、



宮む自富業を成功させています。千葉の社長なら名古屋の社長と言っても良いと思われていました。お子さまもすでに独立されておりますが、あいにく糖尿病と出会い、長年つきあってきたと言われます。

一昨年の五月には



井上文子さんと武田卓夫さんは初めての参加でもありました。四十五歳のまだ若いときのものです。

私たちも七十を過ぎました。そろそろ体も疲れてきていますが、長寿国と言われる日本の今日まだまだやりたいこともやることも出来るお年頃ともいえます。残された私たちは今以上に体に気をつけて先に逝かれた正治さんにその後の報告が出来ると願うことだと思えます。

今野正治さんのご冥福を祈ります。

卯年、大雪、

しかし元気に



飯塚和雄

画像＝羽後町公式ホームページ「古里だより」より

1月も今日・明日だけとなりまして。おくれればせながら新年おめでとうございます。

今年が卯年ということでは私たちの大部分は6回目の年男・年女として例年とは少しあらたまった気持ちで新年をお迎えのことと思えますがいかがでしょうか。ウサギにあやかっけて元気にこの1年を飛びぬけていきたいものです。

昨年をふりかえってみたとき、いろいろあった中で思い浮かぶことの一つに最近の異常気象があると思えますが、この冬はあの夏の暑さなどを忘



れさせるような豪雪となっています。暦の上では間もなく立春ですが、まだまだ降り続くのではとこの気象情報を見入っています。

全国ニュースでは秋田県の中でも横手市の状況が伝えられるようですが、湯沢市も羽後町も勝るともおとらずの状況です。地元紙「さきがけ」には「豪雪地帯羽後町仙道地区」で20年ほど前から結成されていた雪下ろしグループの活躍が大きく紹介されましたし、記録的積雪量・過去最高・・・といった見出しがよく目につきます。

今日の「さきがけ」のコラム「北斗星」に雪の結晶の研究者の「雪は天からの手紙」という言葉が紹介されています。もちろん、この研究者の「手紙」の意味は雪の量というものではありませんが、この冬はあまりにも長い分厚い手紙をもらい続けましたように思い、手紙ではなくハガキにしてください

とお願ひしたい気持ちです。さらに、天にむかって恐れながら、「便りのないのがよい便り」と聞いたこともありますので、少しお休みください・・・などおわがままをつげたいのりたくなります。

さて、地元の近況ですが、昨年末に集まる計画でしたが残念ながらできませんでした。例年であればそのような場合、新年会となったわけですがこの大雪ですので正直なところ同級会どころではなく雪相手の日々です。それだけに雪国の春が本当に

言田 緊急ルポ 県南大雪

「過疎化進む豪雪地帯・羽後町仙道地区」

雪下ろし集団がお助け

支え合いで不安解消

羽後町の中心部、西馬音内地区から県道57号で西へ約10キロ。真坂峠を越えた先に、町内で最も雪深い仙道地区がある。幹線の県道は除雪が行き届いているが、道路両側には高さ2メートル近い雪の壁が続く。そんな県内有数の豪雪地帯で、地区の大工や農家らでつくる雪下ろしグループが活躍している。

15日朝、同町中仙道。小沼章一さん(57)と妻愛子さん(78)の2人暮らしの住宅の屋根には、1・5メートル近い雪が積もっていた。その屋根に上り、スノーダンプなどを使って雪を下ろしていたのはグループの

待ち遠しいところですが、大寒中にあって「春遠からじ」を信じるしかありません。年頭早々の紙面にふさわしからぬぐちっほい内容になってしまいました。みなさんどうぞお元気にお過ごしください。

(23・1・30)

さきがけウェブニュース……

メンバー4人だった。

仙道地区の集落で作業小屋の雪下ろしをするグループメンバー15日午後4時15分。グループができたのは20年ほど前。かつては地区にも若者が多く、各家々で雪下ろしをしてきたが、過疎化や高齢化に伴い自力で下ろせない世帯が増えた。

一定の料金を取ることで、大工や農家にとっては冬の収入源にもなるため、地区の有志が自然に集まり、家々の雪下ろしをグループで請け負うようになった。現在のメンバーは50、60代の11人。地区内の高齢世帯を中心に約30軒から依頼を受ける。小沼さんは一昨年末まで自力で頑張っていたが、病気で手術を受けたこと

で体力的に屋根に上るのは難しくなつた。グループに頼むのは2年目。「黙っていても『屋根の雪なんんだあ』って聞いてくれる。親切なもんだよ」。玄関先の雪寄せも近所の人から手伝ってくれるため、大雪にも不安を感じることはないという。

グループのリーダーで建築板金業の佐藤知一さん(83)は「ここら辺はまだ、住民に仲間意識があるからグループもあるし、近所同士で支え合っている。確かに今年は異常な降り方で大変だけど、このくらい雨量ならまだなんとかなるよ」と言う。こうした雪下ろしグループは、同地区に隣接する田代地区や飯沢地区などにもある。地域の密接なつながりは、山間部ほどしっかり残る。

一方で、町中心部の状況はまった



仙道地区の集落で作業小屋の雪下ろしをするグループメンバー

15日午後4時15分

く異なる。同町によると、雪下ろしを頼む当てがつかずに町に寄せられた相談は14日現在で約50件。このうち、半数近くが西馬音内地区からだ。同地区は民家や商店が密集し、下ろした雪の運搬も必要。しかし、短期間での大雪で業者の手がなかなか回らず、焦燥感を募らす住民が多いという。このため町は、佐藤さんのようなグループ代表をはじめ、個人レベルで雪下ろしを請け負える町内の約70人を急ぎリストアップし、相談者への紹介を始めた。町家雪対策本部の担当者はこう話す。「近所付き合い合いが希薄になり、親類も近くに住んでいないためか、誰に頼めばいいか分からないケースが目立つ。運搬や排雪の問題もあり、大雪の影響は山間部より街部の方が深刻だ」

(二〇一一年一月一六付)

一月二十日は

東海でも大雪でした

奇しくも阪神震災の日、朝起きて驚いた。外は真っ白。20センチの積雪はこの地方大変なことである。

雪に対して何の備えもないこのあたりの人はただ啞然としているだけ軒下にあったベニマ板家の前だけ

でも私だったが小さな庭には妻が大事にしているガーデニングの花たち。バンジードア等がすっぽりと雪の中その一つ一つを両手で雪を払う。花たちが苦しかった！と顔を出す。何十年ぶりに雪かきをしたことが腕も痛いし腰も痛い。でもなぜか心地よい疲れである。豪雪という秋田の人たちには叱られそうであるが。

孝之助

い。消息往来でもなく、お知らせでもない。

最近では孝之助さんに、オンブニダッコだ。今ではもう私のところへは何の連絡も無い。これで良いのだがその分孝之助さんが大変なのだろう。

「まどい」のホームページにはサブタイトルに「1955年中学校を卒業したものの達和と絆のものがたり」なんてたいそうなフレーズが書かれている。しかし同級生でこのホームページを見ているのはたったの2名。インターネットなどにはだすほどのものでは無かったのかも知れない。

そんな諸々を考えると、やはり200号で終わりにしても良いのかなと思ってしまう。それでも続けてほしいと言う人も何人かいるようだが、この辺で静かに消えていっても良いのかも知れない。(3)

「まどい」200号まであと2号です。

あと2回の発行で200号となります。その昔、200号までは何とか頑張らなくてはと思っていました。でも「号数」はそんなに意味があるわけでも無いのですね。

最初のころは私たちがまだ16歳、10歳と六つ……。そんな子供のころ始めた「まどい」が今72歳の老人となる年齢でまだ16歳を引っ張っていると言うことだろうと思う。そこに何の意味があるのかをやってきた私さえ分からない。実はいまでさえはっきりしていないのです。そんな中でもバックナンバーは積み重なっていきます。

ニュースでもなければ文集でもな

雪の犠牲者、仙道でも

今年の冬は、特に県南において豪雪に見舞われました。2月5日現在で死者が12人に達し、登り昨年(2010年)を大幅に上回っています。そのうち死者は10人。2月6日には、中山道の村上西夫さん(54歳)が作業小屋の軒下約1メートルの雪に埋まってなくなるといふ痛ましい事故がおきています。

大阪大震災から十六年

くそして

高橋孝之助



きの様子は以前「まどい」(一四八号)で紹介した通りである。前置きが長くなったがなぜ急にこの話になったかという点、すでに承知してみえるとは思いますが、今野正治さんが昨年八月に亡くなりました。

平成七年一月十七日午前五時四十分、阪神淡路大地震がおきた。全国で体感したほどの揺れであった。その被害者六千四百三十四人(死者と認定された人三百二十八人、又国や自治体から借りた「災害援助資金」の債務を抱えたは一万人のも登るといふ。

この年の三月十九日、突然大阪の勝太郎さん兵庫県の良美さんを励ます意味で同級会をやるうではないかと話が出て、参加者十名で大阪へと向かったのである。

清五郎・栄治・朝蔵・崇文・芳雄・孝之助・正治・勝之助・良美であった。時が時だけにひんしゆくを買ったが、その心配はなかった。このと

彼との最後の時だったので。大阪へ行った時は泊まれない今日帰ると言っていたのにみんなの楽しい雰囲気になり飲み込まれ泊まることになった。そのときの彼は本当に楽しそうに良美さんに抱きついてはふざけていた。あのとときの彼の笑い声、顔が目に浮かぶ。

又一人大事な仲間が逝った。なぜそんなに急ぐのか、悲しいよ、先に逝ったみんなにうまく会えたのか我々ももう少しこの世とやらに残ってると。いずれ会うこともあるだろう。でも待っていてくれとは言わないよ、君のあの人がつこい笑顔は忘れられないよ。どうか安らかに眠ってください。

合掌

上の写真良美さんは泊まりナシで帰った。カメラは芳雄 翌日の大阪城見学である。

編集手帖

まず最初に、今野正治さんのご冥福をお祈りいたします。

猛暑・噴火・豪雪、人の暮らした自然の驚異が襲いかかっています。とても大きく力ですが、が、自然の驚異にさらされると言うことは、逆に人は自然に逆らって生きて居るともいえないでしょうか。

今年には仙道で3メートルに至る積雪が合ったとか、昔を彷彿とさせますが、「ホネツコ道」はもう歩く事もないでしょう。

暮れには地元で会をもてなかつたようですが、関東中部は元気なよう「やろうやろう」と声が挙がっています。東京はどバス観光が良いとか、そのうち具体的になるのではと思われませんが。

さてソロソロ早い人で72歳になります。元気な私は医療費二割負担、介護5の妻は3割負担という変な制度で面食らっています。まだまだ元気で居なくてはと思っていますのでみなさんも持病などうまくつきあって長生きしてください。(S)

高橋孝之助様IIカンパありがとうございます。